

真宗文庫

---

望郷の問い  
—永遠の人 親鸞—

伊東慧明



---

東本願寺出版



## 本書について

人間とは何か―。これは人類の誕生とともに始まった原初の問いであり、私はどこから来てどこへ帰るのか、人間存在の故郷を求める純粹な問いです。それは、私たちの日常を離れてあるものではありません。人生が思うようにならない時、忙しい日々<sup>むな</sup>にふと空しさを感<sup>むな</sup>じる時、みずからの「死」を意識する時…、「人間<sup>わたし</sup>とはいったい何か」、「この人生はどこへ向かうのか」と、問わずにはいられないのが私たちではないでしょうか。そしてこの問いは、釈尊（お釈迦さま）が王宮の何不自由のない生活を棄<sup>す</sup>て、求道の旅へと出立<sup>しゅつたつ</sup>することとなつた、仏教における根本課題でもあるのです。

その課題に真向<sup>しんめん</sup>かつてきた仏教の連綿<sup>れんめん</sup>たる歴史において、平安末期の日本に生まれた僧・親鸞<sup>しんらん</sup>聖人の明らかにした教えを仰<sup>あお</sup>いできたのが浄土真宗です。そして、真宗大谷派では、近代に至って教えが因習化・形骸化しつつあるという危機感から、私たち一人ひとりの生きる依<sup>よ</sup>りどころとなる、本来の教えに還<sup>かえ</sup>

ろうという動き（同朋会運動）が起こりました。現在まで続くその運動の中で掲げられたテーマが、本書の章立てともなっている「人間」「本願」「念仏」「信心」「生活」の五つです。

物質的・経済的価値観に翻弄され、流転るてんの人生を免れない現代、「人間」とは何かという永遠の問いに立つ私たちに、親鸞の教え（「本願」・「念仏」・「信心」）はいかに応え、そこからどのような「生活」が始まっていくのか。

本書をとおして、人間として生まれた私たちの根本課題を、帰るべきいのちの故郷を仏教にたずねる歩みが始まるご縁となることを願っています。

東本願寺出版

もくじ

序章

- 一 如来と人間の関係 10
- 二 衆生の本国 17
- 三 自力は尽くさねばならぬ 25
- 四 浄土から来た人 34

人間の章

- 一 死もまたわれらなり 46
- 二 まこと心の回復 56
- 三 仏となる人の誕生 66

## 本願の章

- 一 母なる大地 80
- 二 浄土の憲法 91
- 三 如来国家の人民 99
- 四 心も身も癒す願い 107

## 念仏の章

- 一 煩惱は力なり 120
- 二 転成のはたらき 129
- 三 いのちの活動 140
- 四 法蔵菩薩の誕生 149

## 信心の章

- 一 信は力なり 160
- 二 我の内に如来あり 168
- 三 人間成就のはじめ 179
- 四 如来より誕生する 194

## 生活の章

- 一 真宗の生活 208
- 二 南無する人 215
- 三 浄土と穢土の対応 224
- 四 闇にかがやく宿業 233

## 〈凡例〉

\*本文中の「聖典」とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

\*本書は、一九八三年初版発行の『入門浄土真宗 真宗の教え―顕現さるべき私―』を文庫化したものです。文庫化に際し東本願寺出版の責任の下、以下のとおり編集を加えました。

- ・読みやすさを考慮して一部文言を修正、ルビを追加整理しました。
- ・引用文は可能な限り原典に基き確認し、仮名遣いを現代仮名遣いに統一しました。



# 序 章

## 一 如来と人間の關係

現代を生きる私たちにとって、「今こそ『親鸞』が必要だ」という多くの人の声<sup>び</sup>が聞こえてきます。時代の隔<sup>へだ</sup>たりを超え、民族の異<sup>こと</sup>なりを超え、思想の違いを超えて求められる『親鸞』という名<sup>な</sup>の人がおられる。このことは、ただごとではないと思います。

その親鸞聖人によって明らかにされた宗教、それが大乘<sup>だいじょう</sup>仏教の真宗<sup>しんしゅう</sup>、浄土の真宗です。こんにち、この激動する時代・社会の中で、人生の依<sup>よ</sup>りどころを求め、生きることの意義を見<sup>み</sup>いだしたいと願<sup>ねが</sup>う人びとと共に、真宗の教<sup>きょう</sup>えを、どのように理解し、どのように表現し、そしてそれを多くの人びとに、どのように伝えればいいのか。

おもえば、私たちの先達<sup>せんだう</sup>は、その時その時、それぞれの場において、この課題を明らかにするために、努力のかぎりを尽くしてくださいました。それが